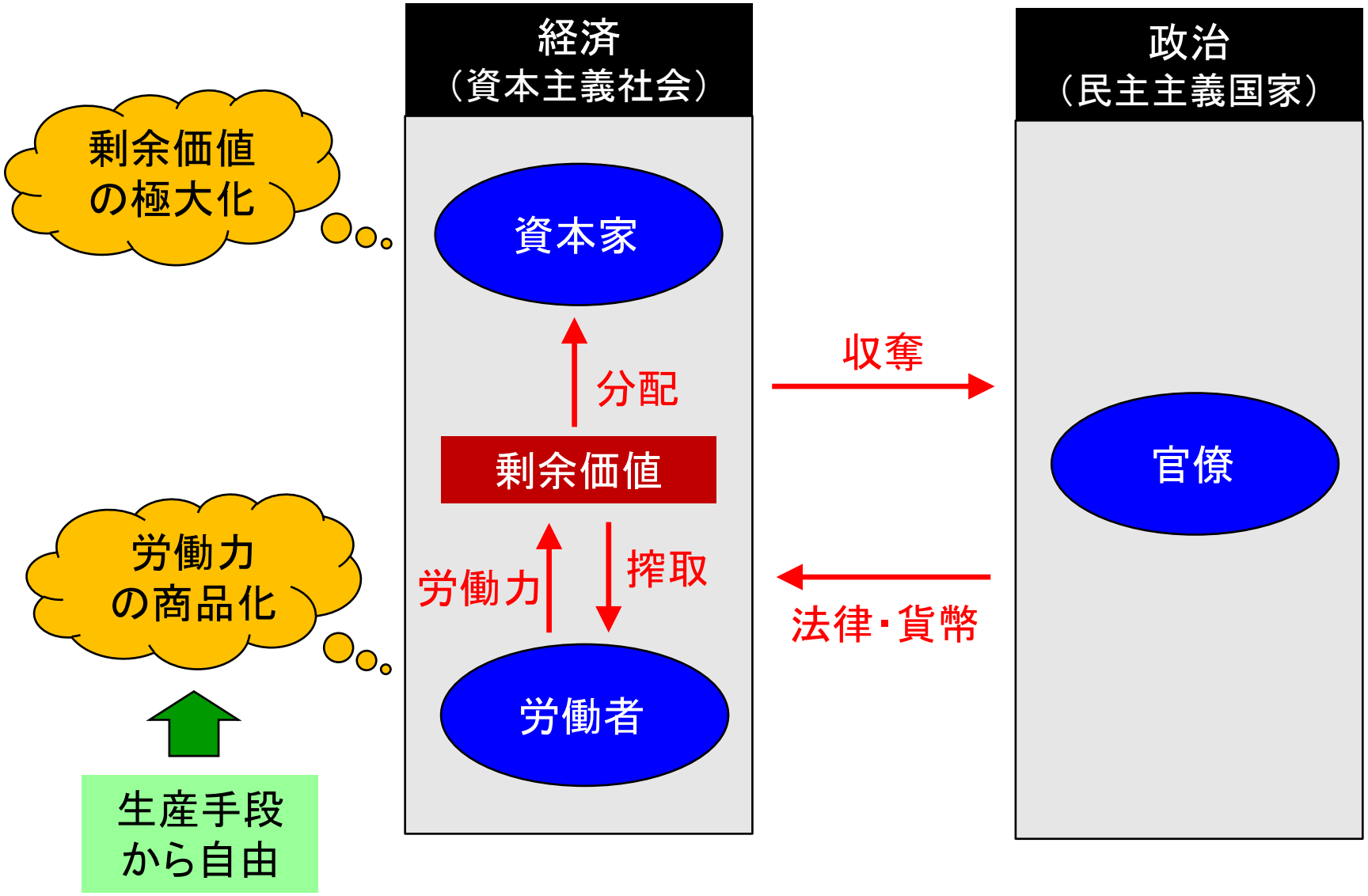
ピカイチ先生の
生活経営セミナー

2020年07月
「資本論」から学ぶ生活設計
（①資本制社会とは）

ネクストライフ・コンサルティング
〒975-0038
福島県南相馬市原町区日の出町167-3
info@next-life-consult.com
ピカイチ生活経営塾　検索

ピカイチ先生

資本制社会のしくみ（1/2）



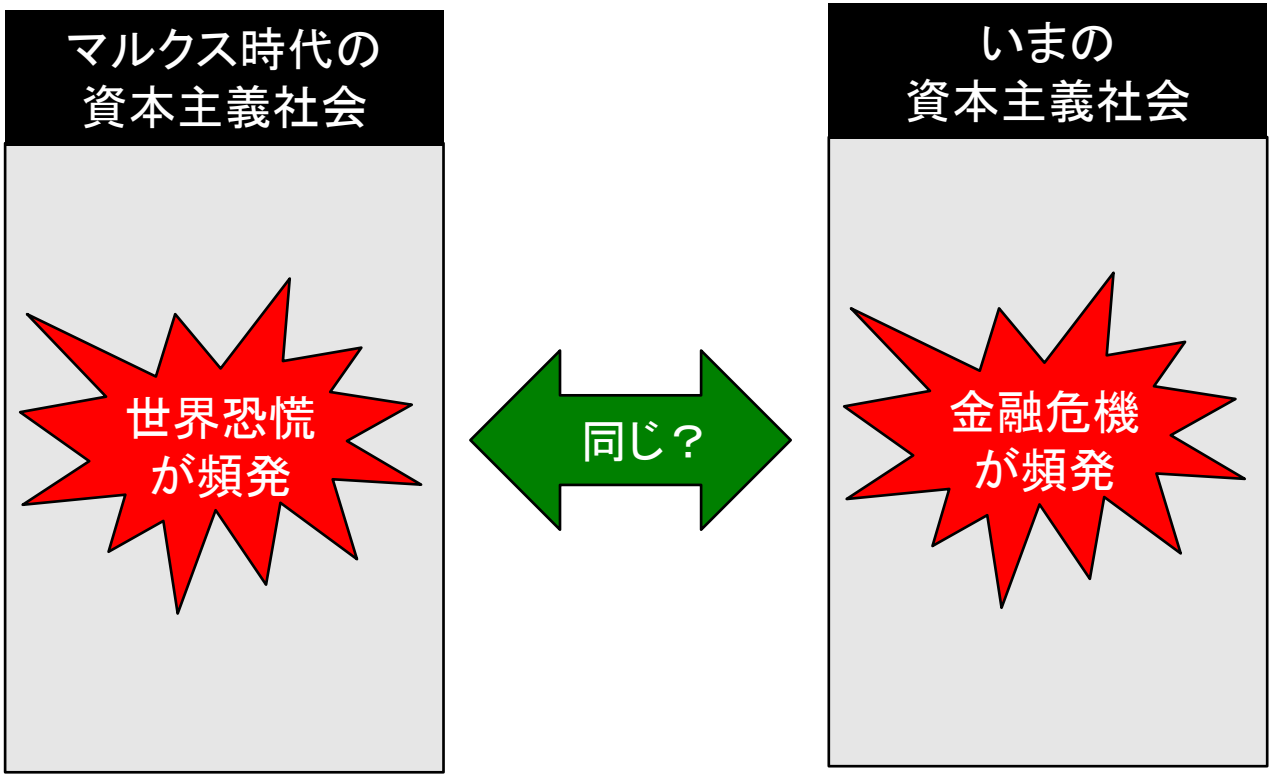
資本制社会のしくみ（2/2）

【参考文献】

・いま生きる『資本論』（佐藤 優）
・いま生きる階級論 （佐藤 優）
・資本主義の極意 （佐藤 優）
・『資本論』の核心 （佐藤 優）
・高校生からわかる「資本論」（池上 彰）
・武器としての「資本論」（白井 聡）
・マルクスが日本に生まれていたら （出光 佐三）
・はじめてのマルクス （鎌倉 孝夫、佐藤 優）
・21世紀に『資本論』をどう生かすか （鎌倉 孝夫、佐藤 優）
・希望の資本論 （池上 彰、佐藤 優）
・国家と神とマルクス （佐藤 優）
・マルクスの『資本論』（フランシス・ウィーン）
・マルクスは「現代」をどう読むか （宮崎 哲也）
・マルクス経済学がよくわかる本 （阿部 真也、宮崎 哲也）
・マルクス 資本論の哲学 （熊野 純彦）
・人新世の「資本論」（斎藤 幸平）
・マルクス いま、コミュニズムを生きるとは？ （大川 正彦）

マルクス時代の資本主義が復活（1/2）

なぜ、いま「資本論」が見直されているのか？



マルクス時代の資本主義が復活（2/2）

『資本論』をマルクスが書いて以降、いわゆるマルクス主義という思想が生まれ、共産主義運動が盛り上がって共産党ができたり、ソ連や中国で社会主義革命が起きたりしました。 マルクスという人の考え方によって、世界が動き、新しい歴史が生まれたのです。

この本を、マルクスは今から 140年前に書きました。 当時のヨーロッパ、とりわけイギリスやドイツ、フランスなどの経済の実態を分析し、そこから当時の資本主義の「本質」について書いた本です。

140年前の本ですから、もう時代遅れ、役に立たないと言われてきました。

ところが、このところの金融不安、金融危機が広がっています。

金融危機という言葉を使っていますが、実際は世界恐慌です。 マルクスの時代はしょっちゅう起きていたことですが、その世界恐慌がまた起きてしまいました。

いつの間にか、マルクスが分析した資本主義が復活している。 そこで、マルクスの理論・主張が、今あらためて見直されるようになったのです。

『高校生からわかる［資本論」』（2009.06.30　池上 彰）より

マルクス経済学とマルクス主義経済学（1/2）

『資本論」 ＝ 資本主義経済の本質を客観的に明かす壮大な「知的建造物」

↓

マルクス経済学 ＝ マルクスが打ち立てた『資本論』に代表される経済理論。

↓

『資本論』の中心テーマ

・資本主義は、矛盾の暴力的解消としての恐慌を繰り返すなどして、自己崩壊する。

・封建社会に代わって登場した資本主義もまた、新たな階級社会である。

参考文献：『マルクスの経済学がよくわかる本』

マルクス経済学とマルクス主義経済学（2/2）

『資本論』のテキストを注意深く読めば、マルクスに二つの魂があることに気づく。

第一は、資本主義という社会システムの内在的論理を全体としてとらえようとする観察者としての魂である。

第二は、資本主義社会の限界から革命が発生し、新たな共同体、マルクスが言うところの共産主義社会に向けた転機が発生することを期待する革命家としての魂である。

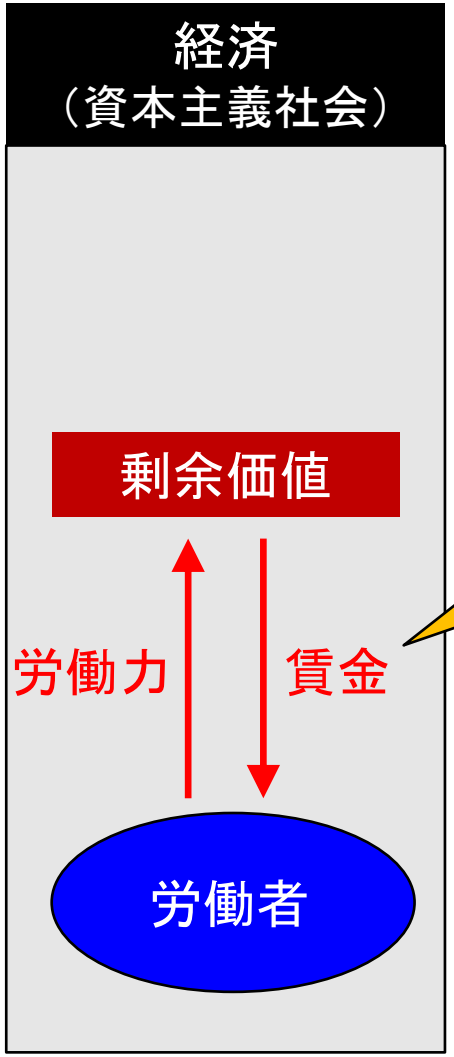
これまで多くの人々は、第二の立場から『資本論』を読んでいた。 1917年 11月のロシアにおける社会主義革命の成功が、『資本論』の言説の正しさと受けとめられた。

そうなると論理的必然として、1992年 12月のソ連崩壊で『資本論』の言説が誤っていたことが証明されることになる。 政治的、歴史的に誤っていたことが明白な言説を考察する必要はないと考え、『資本論』は忘れ去られた書物になった。

しかし、『資本論』のテキストにあたって見れば、このような見方が間違えていることがわかる。『資本論』で述べているのは、資本主義システムの限界であり、それを超克した社会主義社会、共産主義社会については何も書いていないのである。

『マルクスの「資本論」』（2007.09.20 フランシス・ウィーン）解説より

剰余価値の極大を目指す（1/3）



【労働力の再生産】

① 1ケ月働いてくれるエネルギーが出るための食糧、住宅、衣料

② 家族を維持するための費用

③ イノベーションに伴う自己教育

剰余価値の極大を目指す（2/3）

マルクスによると労働力は商品であり、その価値は他のすべての商品と同じように、それを生産し、再生産するために必要な労働時間量で決定される。 人間の価値を、人間があたかも豆の缶詰であるかのように評価するというのは、グロテクスに思えるかもしれない。

しかしマルクスはまさにこのことを指摘するのである。「資本家見習い」氏にとっては、労働市場も商品市場の一つにすぎない。 それでは「資本家見習い」氏は、この特別な商品の価値をどのようにして評価すればよいのだろうか。

労働者は死すべき存在であるため、この全体には「労働者の補充要員、すなわち労働者の子どもたちの生活手段も含まれるのであり、この独特な商品の所有者が、市場に永続的に存在しつづけることができる必要がある」のである。

またこれには「通常の労働力に対しては、ほとんど取るに足らないほど少額であるが」、教育と訓練のための費用も含まれる。

ここで著者が、マルクスは、資本家になることを志望する「資本家見習い」の視座で、現象を観察しているという見方をしているが、評者も同意見だ。 言い換えるならば、マルクスは、労働者の立場ではなく、資本家の立場で資本主義を見ているのである。

（次頁につづく）

『マルクスの「資本論」』（2007.09.20 フランシス・ウィーン）解説より

剰余価値の極大を目指す（3/3）

それだから、生産過程における労働力商品の重要性がわかる。 労働力商品の対価である賃金は、労働に対する対価ではない。

労働力とは、例えば 1か月 25万円の賃金をもらう労働者が、家を借り、食事をして、服を買い、それにちょっとしたレジャーで再び次の 1か月に働くエネルギーを回復するために必要な商品やサービスを購入するための費用だ。

労働力は賃金以上の価値を生み出すことができる。 この差額分が剰余価値なのである。 常識で考えても、企業は従業員に賃金を払った残りがまったくないならば、企業として活動する意味がない。

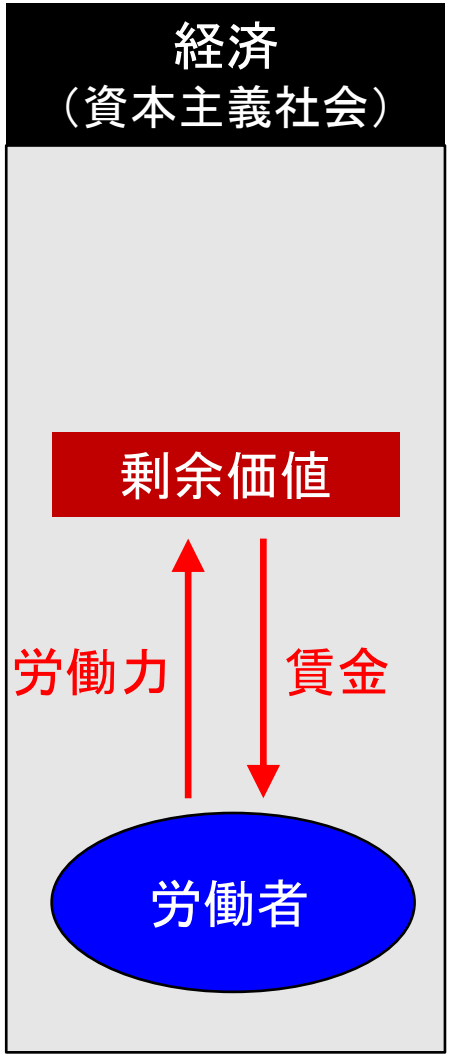
資本家は、この剰余価値の極大化を目指して行動するのである。

『資本論』が解き明かした最大の秘密は、労働力が商品化されて、経済のすべてが商品経済で行われるということだ。

商品が生まれれば、そこから貨幣、資本が生じるのは必然的だから、労働力の商品化から資本主義が生まれるのである。

『マルクスの「資本論」』（2007.09.20 フランシス・ウィーン）解説より

資本主義システムのはじまり（1/3）



誕生

【生産手段から二重の自由】

① 土地に縛られない自由

② 生産手段を持たない
（生産手段から自由）

資本主義システムのはじまり（2/3）

商品経済は古代からあった。 したがって、商品から必然的に生まれる貨幣、資本も古代からあった。 そのことは、アリストテレスの著作や古代の遺跡から金貨や銀貨が出てくることからも明らかである。

ただし、商品経済が経済生活の中心になることは資本主義時代までなかった。実は資本主義は、歴史的に偶然、生まれたのである。

18世紀末から19世紀初頭にイギリスで土地に縛りつけられないという形で身分的に自由で、同時に自活できる道具、機械、原材料、土地などの生産手段を一切持たない（生産手段から自由な）、「二重の自由」をもった近代的プロレタリアート（労働者）が発生した。

資本家が、この労働者から労働力を商品として購入することで、資本主義が生産過程をつかみ、社会全体に浸透したのである。

一旦、社会を支配するようになった資本は、人間の意向など無視して自己増殖を始める。 そして、定期的に恐慌を繰り返しながらも、資本主義システムはあたかも終わりがないように継続していくのである。

（次頁につづく）

『マルクスの「資本論」』（2007.09.20　フランシス・ウィーン）解説より

資本主義システムのはじまり（3/3）

例えば、労働者が賃上げを要求するならば、資本としては事業の効率化（合理化）を求めてくる。

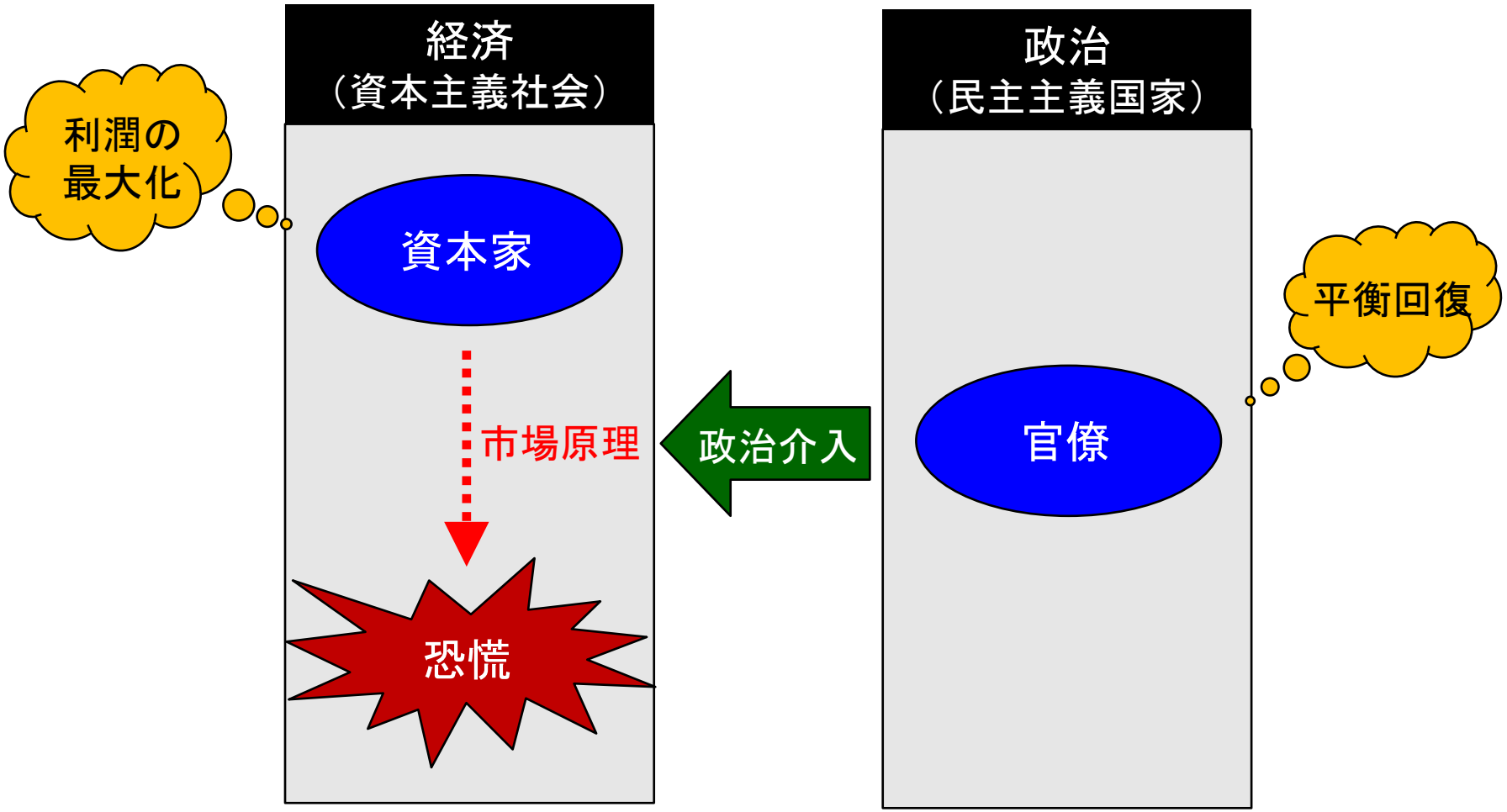
1か月 25万円で雇用している労働者が 2人いるとする。 新型コンピューターを導入し、業務を効率化の結果、労働者 1人で同じ作業ができるようになった。 労働者 1人解雇し、残った 1人の賃金を引き上げ、35万円にする。 資本の利潤は15万円増える。

強力に組織された戦闘的な労働組合が不在の状況で、労働者が賃上げを要求すれば、このように他の労働者を犠牲にするような形でしか問題を解決することはできない。

エンゲルスは資本家であった。 現代の表現で言うならば「勝ち組」だった。 しかし、「勝ち組」にとどまるためには労働者を搾取しなくてはならないような社会構造に我慢できなかった。

『マルクスの「資本論」』（2007.09.20 フランシス・ウィーン）解説より

資本主義システムの限界（1/5）



資本主義システムの限界（2/5）

1980年代まで、東京大学、京都大学、早稲田大学、慶應大学などの官僚と経済人を数多く輩出する大学では、法学部、経済学部においてマルクス経済学の講座が設けられていた。 東京大学の場合、マルクス経済学は必修だった。

これらの大学でマルクス経済学を学んだ学生の多くが、中央官庁の官僚、大企業の経営者になった。

立場としては、国家、資本の側に行っても、資本主義の内在的論理を理解しているので、新自由主義政策の限界を理解している。 一般論として限界を知っている者は無理なことをしない。

『マルクスの「資本論」』（2007.09.20 フランシス・ウィーン）解説より

資本主義システムの限界（3/5）

市場の力を生かしたことによって、資本主義は社会主義に勝ったんだから、このやり方を徹底すれば、経済はさらに発展するんじゃないか、と考えたのです。

その結果、社会主義の国々が姿を消した後、アメリカ流の新自由主義という考え方がどんどん世界中に広まりました。

ところが、金融不安が広がりました。

マルクスが書いていたころの時代には、恐慌というのがひっきりなしに起きていた。

東西冷戦時代で社会主義にならないようと資本主義の国々が労働者の権利を守り、経済がひどい状態にならないようにといろんな仕組みをつくったことによって、恐慌というのは起きなくなっていたのに、新自由主義によって、すべてを自由にした途端に、再び強硬が起きるようになってしまったのではないか、ということなのです。

（次頁につづく）

『高校生からわかる[資本論]』（2009.06.30　池上 彰）より

資本主義システムの限界（4/5）

みんな、「社会主義がつぶれたことによって資本主義が勝った、勝った」という風に思ってしまったんです。

今になってみると、これは資本主義が勝ったんじゃないんだね。 社会主義と言っていた国々が、勝手にこけちゃったにすぎないんだ。

勝手にこけてしまったのを見て、資本主義の国が、「自分たちが勝った」と思い込んじゃったの。 思い上がってしまった。 ここから資本主義の国もおかしくなり始めます。

「資本主義はなぜ社会主義に勝ったのか」とみんな考えたわけ。

その結果、「資本主義は、市場の力を生かすことができたからだ」と考えたんだね。

『高校生からわかる[資本論」』（2009.06.30　池上 彰）より

資本主義システムの限界（5/5）

世の中には、民主主義と資本主義はともに手を携えて進んでいくという仮定が、広くいきわたっている。 実際は、その関係はもっとはるかに複雑である。

資本主義は、民主主義を平衡回復力として必要とする。 資本主義制度は、自力では、均衡に向かう性向をなにも持ち合わせていないからである。

資本の所有者は、自分たちの利潤を最大限にしようとする。 彼らの考えるままに任せておけば、彼らの資本蓄積は事態が均衡を崩すときまで続くだろう。

マルクスとエンゲルスは 150年前に、この資本主義制度をきわめて見事に分析してみせた。 それはある意味では、古典派経済学の均衡理論より優れていたと私は言いたい。

二人が処方した治療策の共産主義は、病気そのものより悪質だった。 だが、彼らの悲惨な予言が現実のものとならなかったのは、民主主義諸国でそれに対抗する政治介入があったからだった。

『グローバル資本主義の危機』（1999.01.18 ジョージ・ソロス）より